

「なぜ私は私なのか？」

2014年8月22日(土)
 会場：Alba Cafe (外苑前)
 参加：14名
 司会・文責：堀越

1. 概要：

- 新規参加者3名を含む総勢14名で「なぜ私は私なのか？」をテーマとして、主に「痛み等のクオリアを実際に感じる何かはあるか?」、「身体物質が再現されればその何かも再現されるのか?」について考え、対話した。

2. 対話：

(0) テーマ～一体どういう問いなのか？

- 「ウィトゲンシュタインの誤診」から思考実験1を紹介し、問いの「なぜ私は私なのか?」とは「なぜ私1および私2が私3であるのか?」であることを説明した。

No	登場人物	〈私〉	Cという名の〈私〉	
			ふつう	思考実験(今回)
1	感覚身体 (感覚器官を持ち損傷を被った人物)	私1	C	C
2	運動身体 (うめき声を発し痛いと言語を表出した人物)	私2	C	N
3	主体～何か (痛みを感じ、痛いと言語を意図した人物)	私3	C	Y

- 参加者からの「どう考えても、「私1+私2=私3」とは思えない」との指摘に、進行から次のように補足した。「問いは『なぜ私1と私2という身体中に“感じる何か”(=私3)があるのか?』である。

(1) 思考実験1「痛いのは誰?」 --- 永井均著：「ウィトゲンシュタインの誤診」 p204 より

- 私3を「主体」と呼ぶことに違和感を覚える。私3が他の私1と私2よりも特別かつ優位であるような印象となるが、そういう先入観がないか。
→主体と名付けてしまったことは進行役に先入観があった。違和感があれば、「主体」でなく、「何か」と呼ぶことで良い。
- 思考実験におけるY=私3を想定する必要があるのか。それがなくとも、私というものを説明できないか。痛みがセンサーである感覚器官で刺激として入力され、神経を経由して脳まで伝達され、そこから何らかの指令が発信されて、また神経を経由して口に至り発語がなされるという考えである。
→私3(=Y)を想定せずに私1と私2しかないという考え方もできる。しかし、自身の実感としては、どうしても痛み等のクオリア*1)を感じている私3がいるように思える。
*1) 心的生活のうち内観によって知られうる現象的側面。特に、それを構成する個々の質、感覚をいう。
- ①：「私1と私2はなくて私3しかない」あるいは②：「私3はなくて私1と私2しかない」という場合は想定できるか。
→①は、身体感覚がなくなっている場合で、身体障害があるときや睡眠時の夢中状態であるときがそれに当たる。②は、意識がないときがそれに当たりそうである。
- 本来考えたいポイントは、「特定の身体を持つ存在には、なぜ私3という、その存在にとっては唯一の何かがあるのか」という点ではないのか?
→これに答えて、進行から「それを思考実験2で考えたい」と説明した。

(2) 思考実験2「ある未来の話のこと」 --- 飲茶著：「哲学的な何か、あと科学とか」 “どこでもドア” より

- 「どこでもドア」の設定として、入る前に転送者の物質構造を徹底的にスキャンし、同情報により転送先のドアで再構成・構築することにより転送者が移動する仕組みであることを説明した。その上で、「このどこでもドアの転送前と転送後で、私3は同じなのか」と問いを提起した。
- 分子破壊光線でも自分の身体の物質がバラバラにされた瞬間に自分(=私3)は死ぬのではないか。
- 自分の身体を構成している物質からは全く断絶した別の物質から身体が再構成されるなら、自分の身体とは連続性がなく、(私1と私2ではないのだから)もはや自分(=私3)とは思えないと思う。
- 自分と別物質だから自分と思えないなら、心臓移植(他人の臓器移植)はさらに掛け離れるが本当か。
- 自分(=私3)が継続するかどうかは自分でないと判らないため、実際にやってみないと分からないのではないか。
- このどこでもドアを使うとき、自分の記憶が一部でも欠落するなら、受け入れられない(嫌である)。
- このどこでもドアで自分(=私3)が他の場所へ乗り移ることは不自然である(考え難い)ので、そういう現象は起こらないのではないか。
→そうとは限らない。例えば、転送元と転送先とで一旦2人の自分(=私1と私2が二人)ができると考え、視覚情報も転送元と転送先での2つの景色が見えて確認できて(前後を通じて私3は一人)から、片方の景色がなくなる(片方の私1と私2が消失)のなら、自分としては、安心でき、受け入れられる。
- 自分(=私3)は、最終的には物質=脳であると思うので、どこでもドアでも継続できると思う。

3. まとめ：

- 2つの思考実験を考えることで、問いに答えるために必要な前提を確認できたと思う。
- 「どこでもドアの転送前と転送後で私3は同じなのか」の問いは、前後の身体における断絶性を対話し考える中から「同じ」「違う」という二つの答えが提起された。
- 問いへの思考を深める観点からは、ようやく端緒に立てた印象である。また同じ問いを挑戦したい。